金沢城下絵図史について

矢守一彦

【要約】城下絵図の地図史的研究を拓いてゆくためには、(1)諸城下に遺された多種多様の絵図を分類し、対比考察するとともに、(2)なるべく多くの個別城下についての絵図史をカルトグラフィシュにあとづけてゆく要がある。小稿では(2)の一つの試行テストとして金沢の場合を選んだ。まず初期の伝存図では、正保城絵図の趣を示す寛文八年図、および同様の壮麗さを備える寛文七年図・延宝諸図が、それぞれ幕府調進図および藩用図を代表する逸品である。ついで享保期にも有沢武貞の手になる優秀な諸作品があらわれるが、ことにその「賀州金沢町割之図成之弁」は本図作成の前後における当藩のカルトグラフィーの脈絡をたどる上で看過できない。文化・文政期では「町方絵図部分図」と「御次御用十九枚御絵図」が重要である。この時期以降に属する数多の絵図群についてはこれを主題図と一般図にわけ、さらに後者に関しては有沢武貞図との異同などを標識として系統分類を試みた。

史林　六二巻三号　一九七九年五月

はじめに

小稿は史学研究会の一九七〇年度大会における報告「城下絵図史の方法」の一部である。城下絵図の地図学史的研究は、未だその方法さえもが模索中の段階にあるように思うが、一先ずは(A)質量ともにすぐれた史料を伝える個別城下に即してその絵図史をあとづけること、および(B)正保城絵図に代表されるような、なるべくは同一時期に属する諸城下の絵図を〈ヨコ〉にならべて比較検討する方法が考えられる。(A)に関してはこれまでに米沢①・福井②について発表したが本稿もその一環をなすもので、後掲の二つの別稿と併せて金沢城下絵図史の素描、――そして希くば個別城下絵図史の一つのサンプ

ルとして御批判たまわりたいと思っている次第である。なお、(A)と(B)は元来、経緯絡み合せてこそ意味もあろうというものだが、(B)については先に若干報告したところなので、[3] ここでは話題を金沢図プロパーに限らせて頂いた。

さて、金沢の城下絵図については、夙に増田荘登男・田中喜男氏の研究が発表されている。増田氏のそれ[4]は短報ながら、研究成果が凝縮された形で、系統図として示され、田中論文[5]は、石川県立・金沢市立両図書館の所蔵図を中心に、その他若干の県下所在の金沢城下絵図について、初めて体系的な調査・整理を施したものとして高い価値があると思う。本稿は右の両編に負うところが多く、さらに田中教授には調査に際しても多大の御教示・御支援をたまわった。すでに両氏によって明らかにされた点についても一応ふれざるを得ないが、できるだけ重複をさけ、しかもその際田中論文は絵図の個々について、八家の当主名、主要建築などを手がかりに作成年代を推定するところに力点がおかれているのに対し、小論ではよりカルトグラフィシュに考察してゆくことにする。また両氏の説かれるところに全く疑義がないわけでもないので、後から進む者の責務として、せめてはこの点を明らかにすることに努めなければならない。

なお、慶長図（「慶長金沢御城古図」など）は城内になお重臣たちの屋敷が描かれ、古い内山下の様相を伝えるものとして歴史地理的には面白いが、[6] 後の城下絵図史には直接むすびつかないのでここでは省略する。また、寛永図（いわゆる「石浦神社氏子図」）も、事実は森田平次の考証のように元禄～享保に成った一種の「歴史地図」なので[7]いまはふれない。

① 矢守「米沢城下絵図について――地図史的考察の試み」　史林五六―二。

② 矢守「福井城下絵図史について」『歴史地理研究と都市研究』上　大明堂　昭五三　所収)。なお、個別城下絵図史に属する既往の業績としては阿刀田令造『仙台城下絵図の研究』　斎藤報恩会　昭一一、村上節太郎「重信の計画した松山城下町の変容――古地図から見た」伊予史談二一六などがある。

③ 矢守『都市図の歴史――日本編』　講談社　昭四九　第一部第三章「城絵図と城下絵図」、矢守「城下絵図の類別――特に藩用図について」（藤岡謙二郎編『城下町とその変貌に関する歴史地理学的研究』柳原書店　昭五四　所収)。

④ 増田荘登男「金沢城下古図のしおり」　昭三七。

⑤ 田中喜男・島村　昇・山岸政雄『伝統都市の空間論・金沢』　弘詢社　昭五一　第一章第五節「金沢町図の成立」、田中喜男「城下町古図について」　金沢経済大学論集七―一。

⑥ 田中前掲書　第一章第二節「建設期の城下町」、矢守前掲書　第三

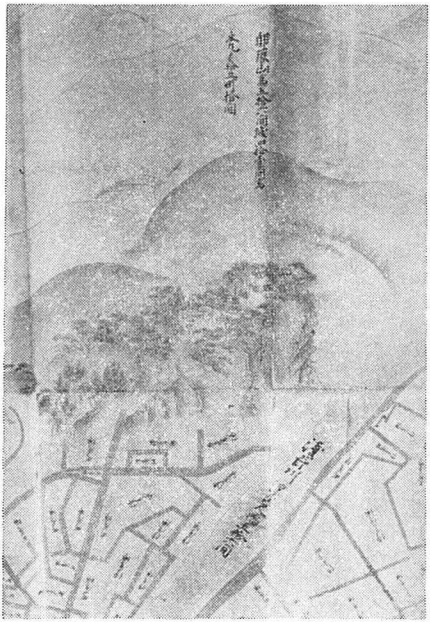
部第二章「㈣金沢」。

⑦「加州石川郡　石浦郷石浦村長谷寺敷地住吉伝来氏子土地七ケ村　石浦村笠舞村保島村朱免野村山崎村今市村木ノ新保村　写絵図」（石浦神社所蔵　一九四×一七九センチメートル）、この県立図書館本（森田平次模写）に同氏が、伝寛永八年作成の本図のなかに後年建立の寺院等の描かれているところから、「按元禄以後享保以前」の作との考証を書き添えている。田中前掲書注⑤　九一～九三ページ。

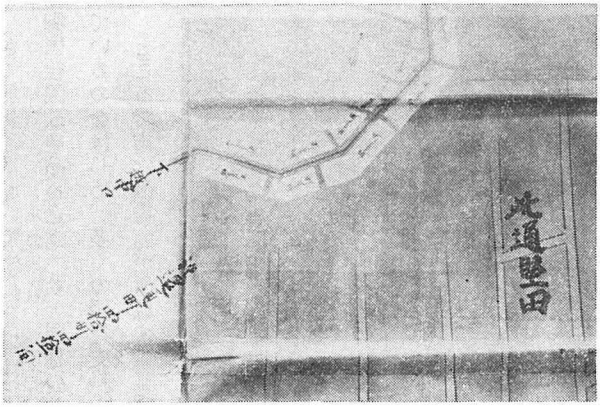
一　正保・寛文・延宝の諸図

さて加賀藩においても正保に国絵図とともに城絵図が調進されたことは、延宝五年の「古ヨリ　公儀江被上候御城絵図御国絵図改申品々之帳」①など同種のリストの冒頭に「一　正保四年金沢御城幷侍屋敷町屋鋪一所ニ記申絵図」が掲げられているのをはじめ、多くの関連史料より明らかであるが、目下、件の絵図の所在は不詳である。

ところで市立図書館が所蔵する寛文八年の、余白に「加賀国金沢之図　松平加賀守」と記入のある二点は（三八〇×三四〇センチメートルおよび三六二×三四八センチメートル）、この記入の仕方をはじめ、「山城　本丸　城外地形より拾五間高　東西九拾二間半　南北六拾五間」という本丸についての注記、「卯辰山高五拾六間成より四拾一間高」など「城より地形高所」の地点の本丸に対する関係位置の記載（第1図）、ブロック毎に施された「侍屋鋪」・「町屋鋪」・「寺屋鋪」・「中間屋鋪」という表し方、「才川深三尺幅五拾間」という川幅の明記等々、正保城絵図にきわめて近い。さらに町通りには町名一切なく「此町筋三町三間」などと間数のみ書込み、しかも黄色く彩色した道の中央に施され



第1図　寛文8年図（部分，その1）



第2図　寛文8年図（部分，その2）

た朱線、田地における「此通堅田」などの軍事的注記なども正保式に属する（第2図）。卯辰山の観音院や樹木、城の石垣などについても重厚な景観描写が行なわれているが、田地のそれは件の狩野派流ではない。

先にひいた幕府への調進絵図リストによれば、寛文八年にも「金沢御城幷侍屋敷町屋鋪共ニ一紙絵図」を提出しており、「御絵図御城外侍屋鋪町屋敷正保四年之絵図与替り申分為可入　御覧彩仕候右彩在之斗之替りニ而其外ハ上リ絵図ニ少茂違無御座候故江戸ニ而ハ此絵図を扣ニ用御座候」とある。この江戸表御納戸土蔵にあった図と、市立図書館の所蔵図とは同一物ではないが、後者が正保図をベースに作成された幕用図の控であることは、つぎの記事[2]からみてもまた確かである。

一、正保四年金沢御城幷地割図　一枚
一、国御絵図
　但此地割を以寛文八年之絵図出来と付札有之

寛文期にはこれとは別に、県立図書館に寛文七年図と称せられる一分一間の極大図（五六〇×五〇〇センチメートル）が伝えられており、延宝期の諸図も蔵されている。田中氏はこの寛文七年図を「実際は寛文八年図と見做すべきであろう」とされているが[3]、この図にはむしろ延宝の諸図と一括りにして然るべき内容が盛られていると思う。また増田氏が「正保から延宝にかけての絵図は、一系統であった[4]」とされたのは、寛文・延宝図が、ともに正保図流に石垣・楼門・樹木などを描きこんで荘重華麗な出来上りを呈していることによったかと思われるが、正保図と寛文八年図は幕用図であるのに対し、寛文七年図および延宝図は家中の屋敷割りを主眼とする藩用図である。両者間には作

成目的、したがって記載内容に大きな相違があると考える。

一、小松より引越并金沢者被下屋敷先規絵図之表直シ申候事

但此絵図最前子ノ十月切ニ在置候所其より末相渡候屋敷之分重而相改寛文七年十月迄所々渡替へ候屋敷書記申候

寛文七年図の余白の書込みには右のような条があるが、「最前子ノ十月」とは恐らく万治元年（一六五八）の前田利常の歿後、小松城下にあった家臣団の金沢帰住に伴ない、同二年の「被下屋敷歩数之定」に従って行なわれた翌三子年現在の屋敷割りを指すものであろう。[5] 寛文七年図および延宝図（延宝図にもほぼ同文の条が記入されている）は、家臣団の城下集住が完成度をつよめてゆくなかで、屋敷配置の実状を把握せんとするところに絵図作成のモティーフがあったであろう。

このため寛文八年図が「侍屋鋪」とブロック毎に一括して地類を示したにとどまった部分に、侍名と各屋敷の規模（足軽屋敷等についてはブロック毎に「足軽」とのみ）が詳記されているほか、右に引用の条に続いて「一　御家中下屋敷藪地御座候分相紋仕候事」とし、「一松の葉　本多安房守下屋敷相紋　一茶の実　長九郎左衛門下屋敷相紋」以下の相紋が列記され、絵図中、三六氏の下屋敷にそれぞれの記号が描き込まれている。

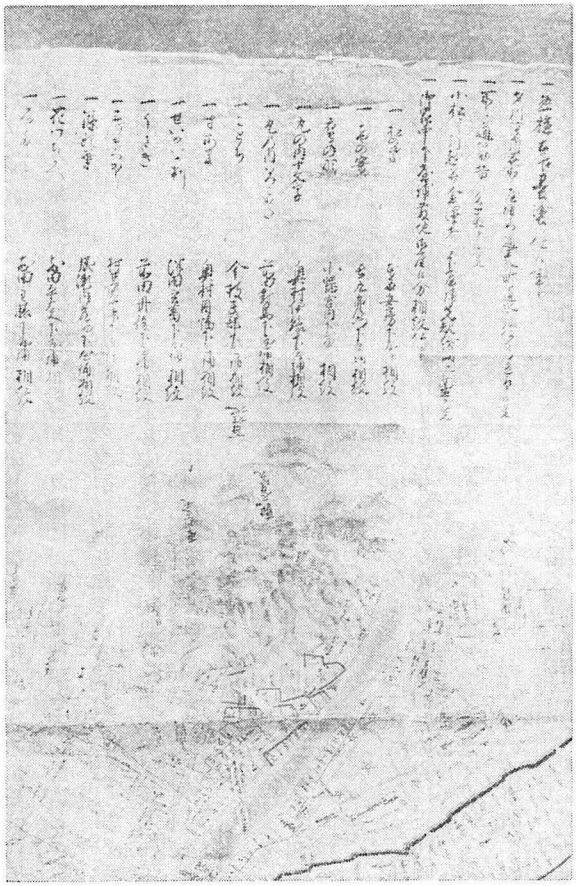
右の二カ条の前には、図式を示すつぎの三カ条が書かれている。

一、御城之堀青ク色取申候惣構之土居ハろくせうぬ里ニ仕候事

一、才川浅野川并所々屋敷之水道其外町廻り水ため何茂青ク色取申候事

一、所々道筋黄ニ色取申候事

ところが道筋は、黄色に筆彩した中央部に朱線がひかれており、この点は正保図式をひき継いでおり、卯辰山の描写なども幕用図のように華麗に仕立てられているが、城内は平面プランを示すだけで景観図的表現は略され、濠幅、石垣の高さなどの注記はない。田にも件の絵画的表現はなく、川幅・水深などの軍事的注記もない。町屋はブロック毎に「町屋」と赤で記入し、その横に地子町には墨で「地子」と書く。



第3図　森田平次旧蔵延宝図（部分）

これを要するに、市立図書館本いわゆる寛文八年図が恐らくは、正保図をしき写し（したがって正保図も縮尺は六分十間であったろう）、表現も正保式であるのに対し、県立図書館本寛文図（寛文八年図）は、卯辰山観音院の描法や、とくに街路の表現に正保図式をとどめながらも、家中の屋敷割り図として新たに作成されたものと考えられるのである。

この県立図書館本寛文図と親縁性のつよいのが延宝の諸図である。延宝金沢図には県立図書館蔵の極大図（五九〇×五四五センチメートル、「延宝大図」と仮称する）、同じく森田平次旧蔵図（一六四×一九〇センチメートル）、同じくこれと同縮尺の絵図（一七五×二〇二センチメートル）がある。最後のものは市立図書館蔵の「延宝年間金沢城下図」（一六七×一九〇センチメートル、大正二年氏家栄太郎氏の模写図）や金沢市観光会館の「寛文延宝頃ノ金沢城下ノ図」（一八六×一五九センチメートル、大正十五年村上莞爾氏模写）と同様、明治以降の写本である。

まず「延宝大図」は縮尺（一分一間、六〇〇分の一）をはじめ、侍屋敷・下屋敷（濃緑で相紋を記入）・町屋・寺についての記載法、城郭部の省略した表現、観音院などの克明な描写、田を狩野派流の描き方でなく「百姓地」とすること等々におい

て、ほとんどすべて地図史的には県立図書館蔵寛文七年図に等しい。五カ条の凡例もほぼ同じであるが、第一条において「ろくせうぬ里」が「墨ぬ里」にかわり、また第四条の「小松より引越」云々の条において但し書きの部分が削られている。足軽屋敷などについては、ブロック毎に「足軽拾一人同御頭一人」・「足軽五人」など、寛文図より詳しくなり、屋敷割り図としてさらに充実している。ただ一つ、寛文図との大きな違いは、道を表現するのに黄色く彩るのみで、朱線を欠くことであり、幕用図的な要素をさらに減じている点である。

つぎに森田氏旧蔵本は縮尺三分十間、二〇〇〇分の一であるが、内容は、とくに地図史的には延宝大図にほぼ等しい。五カ条の凡例も、第一条において、「御城之堀青ク色取申候」を削り、「惣構土居墨塗ニ仕候事」となり、下屋敷の相紋列記において、マークのよび名や藩士名に若干の異動がみられる程度である。本図はその箱書に「延宝金沢明細書等二帳此金沢高山両絵図者旧藩前田家五世松雲公依命所製之古図実ニ難得珍図也　森田平次識」とあるが、観音院の堂舎を金泥で縁どるのをはじめ、卯辰山一帯や宝円寺周辺の懸崖、総構の土手など、寛文図や他の延宝図に比してもより華麗なのは、藩主綱紀のために仕立てられたゆえかと推測させる。いずれにしても森田氏旧蔵本が「延宝大図」を縮写したものであることはほぼ確かである。前者には仙石町付近、小立野および本多町から笠舞付近にかけての部分に貼り紙が施されているが、貼り紙の下は、「延宝大図」とほぼ同じである。

県立図書館本延宝図写と、市立図書館蔵の氏家氏本は、その内容ほとんど等しいが（ただし前者には凡例五カ条を欠くなどの差異がある）、この二者は森田氏旧蔵本の直接の写しではない（縮尺は三者とも三分十間、二〇〇〇分の一であるが）。すなわち、この二図は、小立野・本多町～笠舞付近に関しては「延宝大図」に、一方仙石町付近に関しては森田氏旧蔵本の貼紙による訂正にそれぞれほぼ等しいのである。また図中において諸士の下屋敷を表わすのに森田氏旧蔵本では紋様を描いているのに対し、この二図では「わりびし」・「もっこう」など紋様の名称を書き入れているほか、森田氏旧蔵本以外の原図からの模写と推定される点が指摘されている。[6]

① 以下、とくに断るもの以外はすべて金沢市立図書館所蔵加越能文庫の文書である。
② 前田文庫所蔵一枚文書（増田「金沢城下古図のしおり」　二ページ所引）。
③ 田中他『伝統都市の空間論』　九九ページ。
④ 増田前掲注②　二ページ。
⑤ あたかもこの時期は金沢城下域の急激な拡大期にあたる。元改作奉行高沢忠順の「改作所日記」下編にも「万治二年以来御城下廻り田畑を潰し、武家・町家等の屋敷と成事夥し」とみえる（田中喜男『加賀藩における都市の研究』　文一総合出版　昭五三　一〇九～一一〇ページ）。
⑥ 「延宝金沢図について――郷土の古地図展に寄せて」　石川県社会教育会館だより八三

二　有沢武貞と享保図

金沢城下絵図史において、寛文・延宝図のつぎに一つの大きなピークをなしているのは、有沢武貞による享保の二図であろう。その一つ、「加陽金府武士町細見図」（市立図書館蔵、天明八年長連屋写）は、袋綴の地図帖の形式をとり（二八×二〇センチメートル）、「城下得失考」・「賀州金沢町割之図成之弁」および金沢御坊、金沢の由縁についての記事、「町図凡例」など一二丁を前文とし、三三丁の割図がつづく。[1] 図そのものの重要さもさりながら、「町割之図成之弁」は、本図の成立過程を叙するものであるが、併せて当城下絵図史の脈絡を辿る上で逸することのできない史料なので、多少引用が長くなるけれども、要所を掲げつつ、若干のコメントを加えてゆくことにしよう（――　――間は割注）。

有沢森右衛門平武貞金沢ノ図ヲ作ラント大志ヲ起スハ元禄九丙子年十五才――此時五月五日ヨリ才次郎郎峻政ト云初名ハ小太郎貞次ト云元禄十三庚辰年ヨリ武貞ト云十八才也元禄十七甲申正月ヨリ森右衛門ト改ム――ノ夏ヨリノ支也其初メ或ハ彦三町――伯父有沢弥三郎重澄後致遠ニ改――或ハ舛形――叔父関屋市右衛門政知入道シテ政知ト云――ニ不遁者在テ往来ノ節小紙ニ其道筋ヲ覚書シ類シテ諸所ヲ記ス者年々是ヲ積テ筐裏ニ春秋ヲ経タリ――是父有沢九八郎永貞初ハ俊貞ト云後年采右衛門ト改ム若カリシトキヨリ図翁遠近道印ト云シ者実ノ名ハ藤井半智トテ越中富山ノ小臣タリ是ニ磁針ヲ以テ計ノ分間ノ図ヲナス業ヲ伝ヘテ武貞幼年タレトモ又習之ヨリ思ヒ立シ支也道印江戸ノ大図ヲ作リ又駿府ノ図ヲ作リタル咄アル支ニテ天下ヲ免ナシタル事誠ニ図翁ナリ――元禄十二己卯年同十

三庚辰 年十七八才ノトキ重テ志ヲ起シ改メ合セテ略図ヲ作ル――庚辰ノ年十二月廿三日ニ茶臼山崩テ其辺ノ絵図ヲナス事ニテ猶是ニ携ル也――

ここまでは享保図には直接の関わりはないが、作者武貞の履歴を自らよく語っているくだりなので引用したのである。武貞の父永貞については先に「主図合結記」の解題書で述べたし、[2] また「図翁遠近道印ト云シ者実ノ名ハ藤井半智」に関しては前著『都市図の歴史――日本編』で一章を設けたところである。有沢致遠は延宝五年組外に列し、御書物役として三〇俵六人扶持をうけ、天和元年兄の遺知のうち一〇〇石を襲ぎ（正徳四年、一〇〇石加増）、享保十一年に御書物奉行まで進んでいる。[3] 関屋政知は右の『城郭図譜　主図合結記』でふれた政春の次男、延宝五年新番歩として三五俵七人扶持をうけたのに始まり、貞享三年家督（三五〇石）をつぎ組外番頭、留守居物頭などをつとめた。享保九年致仕、「入道シテ政知ト云」とは、実名をそのまま号としたものである。元禄から正徳年間の藩の公務・民事・刑事の取扱例を載せた「関屋録」の著がある。[4]

然ルニ有時哉享保五庚子 年七月下旬横山大和守小野貴林――其比ハ監物ト云――ノ許ニ万治年間ヨリ寛文五六年頃迄金沢ノ大絵図――但シ分間ノ大図ナリ――有之大サ三間四方其実兄タル奥村内記平温良ノ許ニ拠テ頼之テ大図ヲ借請即時ニ同学ノ門弟十余人ト言談シ栖老亭ニ集テ八月中旬迄ニ臨書シ畢ノ時ヲ不移三分十間ノ積ヲ以テ其大図ヲ縮テ端々不定ノ所ヲハ自身走リ廻テ見分シ図シ加フ――与力町ヲ初メ所々是多シ――此折カラ町奉行金森内匠橘信近――後ハ御小将頭ト成タリ――宮崎長太夫穂積成信――其節ハ重信ト云当時御小将頭也――両人共ニ毎度交会シ町中ノ図ノ夏ヲ談ストイヘトモ互ニ公私ノ雑用繁シテ是ヲ果サス（中略）

横山氏は重臣八家の一、貴林（たかもと）はその第六代、通称は監物のほか求馬とも云う。従五位下大和守に叙任されたのは享保八年である。[5] この名家に蔵せられた「万治年間ヨリ寛文五六年頃迄」の大絵図は、「大サ三間四方」とあるところからも寛文七年図系統の絵図であろう。奥村温良（はるよし）は八家奥村氏の支家の第五代、宝永三年一万七四五〇石をついでいる。武貞はこの温良を介して借うけた万治～寛文図を十数人掛りで写すとともに三分十間図に縮めたこと、および町奉行らが「町中ノ

図」のことを彼と相談し合ったという事実に留意しておこう。

（欠字）□ノ図出来スルニ付テ由比五郎左衛門平勝尹――其比御部屋物頭御近習ノ取次役ナリ当時ハ段々役替有テ御馬廻頭タリ――ヲ以テ吉治公――此節未江戸ニ御座ナサレ御入国無之ナリ――御慰ニ指上可申哉不哉ノ支ヲ江戸ヘ相伺ヒ出来セハ可指上由仰出サル――十役ノ抄ヲ最中述作スルニ依テ昼夜片時モ余暇トテハ無之ナリ――享保九甲辰年七月吉治公御入国有テ八月十一日武貞モ御細工奉行仰付ラレ其頃江戸御供ニ召連ラレ其翌年春御帰国ノ御供其年中公務無隙也――御入国御祝儀御能等ナリ――同十一丙午年御細工者奥津文平良当ニ談シテ良当棟取テ絵細工者ノ小暇ヲ拾ヒテ三分十間ノ図中画ヲ墨書シ彩色ヲ加ヘン支ヲ思フトイヘトモ公用自他繁多ニシテ巧ヲ遂ス（中略）

「吉治公」とは第六代藩主吉徳である。田中論文では「臨書」した大絵図を「吉徳に献上した」とあるが、[6] 武貞が献上しようとしたのは、それを縮め修正を加えた三分一〇間図の方であり、しかも「公務無隙」してそれをまだ果していないとみるべきであろう。右に引用の個所はそのことについての弁解である。その「片時モ余暇トテハ無之」理由の一つとして「十役ノ抄」の執筆をあげているが、これは諸士・使番・武者奉行など当藩の「十役」について、その沿革・性格・心得などを叙したもので全一九冊、正徳六年に始め享保七年に脱稿した書。なお武貞のこの他の業績については、日置謙『加能郷土辞彙』などに詳しい。

然ルニ当時町奉行小堀左兵衛溝杭永頼稲垣与三右衛門記秀堅本町地子町ノ肝煎共ヘ云渡シ夫々ノ支配先ノ絵図ヲ致サセ取集ル者四十五枚町人会所ヘ出之両氏共ニ武貞カ旧友中ニモ稲垣氏ハ同門学弟ニテ先年ヨリ武貞カ此図ニ心力ヲ尽スヲ知テ享保十八癸丑年十月廿日過ニ集ル所ノ図共ヲ武貞ニ許借ス武貞左半身不自由トイヘトモ冬天厳寒ヲ不厭十一月初ヨリ十二月上旬迄ニ町中ノ小路々々迄モ悉ク改メ武士屋敷ハ聞ニ随テ名ヲ改メ書且当時加州ノ郡奉行関屋佐左衛門平（欠字）□嗣林源太左衛門源定観ニ談シ町支配ノ外ノ郡支配ノ新家諸所ノ図ヲ集メ因ニ改正シ附且諸組足軽町ノ割等ハ其頭々ヘ言談シ各図ヲ以テ改メ付シ大身下屋敷ノ内道筋モ向寄ヲ以テ乞求メテ改メ正シ（中略）

「然ルニ」の前の中略個所には、享保十五年九月に武貞が「十死一生ノ大病ヲ受テ左半身ノ手足不叶」の状態になり、「役儀ヲ御断申上ル」も「其儘相勤可申旨御出サレ同十七壬子 年四月重御内用仰付ラレ」ることなどが述べられている。従って「当時」とはこの享保十七年ごろを指すが、享保五年ごろの町奉行たちが談合していた「町中ノ図ノ支」が実現の運びとなり、各町肝煎のもとで作成された「四十五枚」の絵図が町会所に提出されたとの重要な事実が述べられている。[7] 武貞はその四十五枚図の成果をもとり入れ、かつ郡奉行支配下の町続き地の諸図をも入手し、彼の城下絵図を充実させてゆくのである。

さて右の引用につづいて享保十九年三月にいたり、武貞は病療養のため役儀御免となり、代って弟の致貞に仰付となる。致貞（むねさだ）は享保元年新番に列し（同五年、一五〇石を受ける）、十八年に養父たる前記の致遠の遺知二〇〇石を襲いで、御細工奉行・物頭並などをつとめたが、兵法・算法に通じて著書も数多く、父永貞・兄武貞とともに世に「有沢三貞」と称された。[8]

此図高覧ニ入奉ル支ハ今ハ近年普請方役所ヘ仰渡サレタル由ナレハ不入支トイヘトモ頃日仕残タル所々閑隙アルヲ以テ改之清図ヲナスヘキ物ニモ非ス爰ヲ切抜テハ接替彼ヲ塗消テハ彩色ヲ改メ終ル志ヲ起シテヨリ三十九年ノ歳霜ヲ心頭ニ経テ今病身半身不叶ノ期ニ致テ成就スルモ不可思議ノ至リ也（後略）

時是享保十九甲寅 年四月中旬於栖老亭――桃水軒有沢平武貞字伯赳敬書之――

ここにも当城下の絵図史にとって注目すべき記述がある。すなわち享保十九年の「近年」、城下絵図作成のことが「普請方役所へ仰渡サレタ」ので、武貞がこの図を献上することはも早、不要になった云々としているくだりである。田中論文には右の個条を引きつつ「正保城下絵図及び寛文・延宝金沢図の作製は普請会所の所管であったが、以降『近年普請方役所へ仰渡サレタル由ナレハ不入事』となっていた如くである」とみえるが、[9] 普請奉行の役所が普請会所である。正保や寛文・延宝図の作成が何役の管掌であったかは定かでないが、享保十九年の近年、新たな絵図の作成が普請奉行に下命されているわけである。

こうして享保十九年に、「加陽金府武士町細見図」と「賀州金沢城下町割正極之図」の二図が完成した。細見図の方は城を中心に、城下を図帖風に横長の一二図にわけている（市立図書館本は泉寺町の分を欠く）。たとえば「御城ヨリ北浅野川々縁岩根馬場辺西御坊町塩屋町鍛治町迄載之但惣川ノ外」・「同武士町方角ハ御城ヨリ北浅野ノ下中嶋町笹嶋殿辺ヨリ小橋大橋関助馬場一番丁ヨリ六番丁迄其外観音町御徒町幷卯辰辺寺々不残載之」のように。

凡例に掲げているのは町家（灰色）、街道（黄色）、寺社、明地[10]の四種であるが、このほか濠・川・上水などの水系には青、橋は朱色、惣構の土手や石垣、近郊の村、城門、観音堂宇、樹木などは絵画風に描写され彩色されている。町屋地区は道路に町名が入れられているだけであるが、侍屋敷地区については家中の姓または姓名が記入されている（ただし屋敷割りの線はない）。町屋地区を彩色したのは「武士家町家に相交り或は町屋と武士家後合せに成其訳難見分ハ色絵を以是をわかつ能見分ケ安き為なり」（凡例）。また寺社には宗派名と寺号が注記してある。寺社は橋の名とともランドマークとなるからだと凡例にみえる。また木戸の印も、街路の通り抜けの有無を示す目印として入れられているのである。

一　金沢所々の寺社の号ハ名所尋候時見充に成或ハ町内長ク難尋時ハ何寺乃近所となりと尋ね便りに成事多し寺地記候事図の専要なり

一　諸家の家中下屋敷通り抜ケ難成所ハ入口ニ木戸を画ク通り抜候所ハ跡先ニ木戸を画其印とす○惣川口々の橋々其外の橋々名を書記す事是亦其所の見当にも成是亦町名と同前也

要するに、つぎの凡例の一条にも示されているように、本図は敢て正確を期するよりは、種々、市中案内図としての便宜を配慮した割絵図ということができよう。他にも大城下では割絵図仕立ての例が少なくない。

一　絵図図[ハカ?]リ或ハ縮或ハ伸候ヘハ大名屋敷ニ而茂小サク成リ小身ニ而茂座取り広くなり申候是又見る者よく推察有べし

武貞は同じ年「加州金沢町割正極之大図」をも作成している。これは三分十間、二〇〇〇分の一図である。[11] 本岡三郎氏蔵「賀州金沢城下町割正極之図」は、翌二十年に大図を一分半十間、四〇〇〇分の一に縮小した図の写本（延享三年富田貞

真写）であり、主要家臣の屋敷には名が入っている。市立図書館蔵のそれは武貞の筆になる一分十間（六〇〇〇分の一）の縮小判である。

淡墨　惣構土居、藍濃　川・堀・用水・池、惣体水の類、萠黄　山・岸・明地、其品々は少々厚薄在之、濃萠黄　植物、萠黄墨畑地、藍墨萠黄　田面、藍墨　屋敷、朱墨　石垣并植物の木幹、紅黄　橋、紅黄土　山限、黄　侍、浅黄　足軽小者、鼠色　寺社、生燕脂　本町、朱之上澄　本町に准ずる町并町人拝領地、丹　地子町・地子地、紫土　門前地町、（以下省略）

右のような凡例を掲げ「二五品を以照見に後れなからしむ」とする。現代の土地利用図の作成意図にも通ずる性格を備えており、都市域の空間構造をみごとに描き出している。彼はすでに地図というものの効用を熟知していたとみてよいであろう。なお武貞の宝永八年の著「町見便蒙鈔」からは、彼が右の享保図を作成するに当って駆使したはずの測量術の技術段階や、遠近道印とのつながりなどを知ることができるが、詳しくはこれも紙数の都合で別稿⑫に譲った。

① 他に粟森博吉氏蔵本、東北大学狩野文庫本などがあり、田中他『伝統都市の空間論』に紹介されている（一〇〇～一〇一ページ）。前者については田中氏よりマイクロフィルムを拝借して検討したが、表題・丁数に少しく異同がみられるものの、主内容に変化はない。

② 矢守『城郭図譜　主図合結記』　名著出版　昭四九　四五九～四六一ページ。

③ 日置　謙『加能郷土辞彙』　北国新聞社　昭三一　二七ページ。

④ 同右　四九〇ページ。

⑤ 同右　九四八ページ。

⑥ 田中前掲書注①　一〇〇ページ。

⑦ 各町の肝煎などの手で所轄の一町絵図が作成され、これにもとづいて惣絵図が編集される手順については、先に若干の城下の事例を紹介した（矢守「城下絵図の類別」）。

⑧ 日置前掲書　二七ページ、田中鉄吉『改訂増補郷土教学』　池善書店　昭一二　八ページ以下。

⑨ 田中前掲書注①　九九ページ。

⑩ 市立図書館本では、「凡例」において寺社・明地の二つには枠どりのみで彩色を欠き、絵図上でも何らの筆彩も施されていない。

⑪ 所在不詳とされる。横浜市長氏所蔵図があるいは原図であろうか。

⑫ 別稿「有沢武貞著『町見便蒙鈔』について」　未発表。

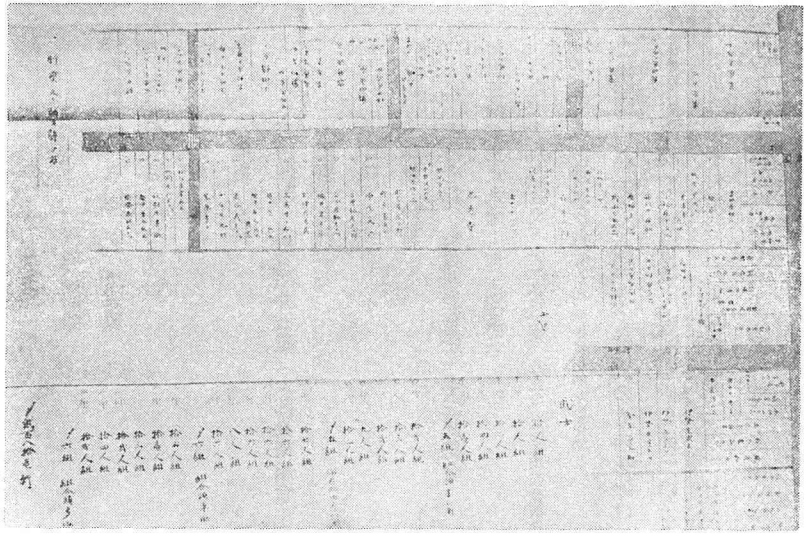
三　金沢町方絵図部分図と各種の主題図

当城下の絵図史は、文化・文政期においてまた注目すべき二つの仕事を加える。そのうち⑲「御次御用金沢十九枚御絵図」については別稿①で報告したが、この大掛りなプロジェクトの推進役の一人有沢貞庸は武貞の孫であり、事実第二章で述べた享保の武貞図が測量作業の基盤に用いられたのだった。いま一つの⑹「金沢町方絵図部分図」は、文化八年、町会所に備付けの図を町奉行に提出した各町単位の割絵図である。才許肝煎ごとに一枚（所轄区域の広いところは二枚）、本来は五〇枚あったものと目されるうちの四〇枚、およびこれに付属する「絵図名帳」一〇冊のうち七冊が、「金沢町惣絵図」・「金沢町奉行支配町筋之図」（文政二年写）各一幀、「町続御郡地御引請之ケ所家建等仮絵図」（文政四年写）一七枚などとともに、金沢市武蔵町井奈武兵衛氏に伝えられてきたが、目下原本の所在は不明となり、大正期の氏家栄太郎氏による写本（各町絵図二七枚、惣構絵図六枚、名帳五冊よりなる）を、⑼文政二年の写図とともに、市立図書館「氏家文庫」で見得る。

「絵図名帳」初冊の冒頭に左のような文化八年十二月の横目肝煎の添書があって、本図成立の由来などをある程度知ることができる。

町御支配惣絵図前々ゟ町会所ニ有之候所、ケ所并見当相違之義御座候ニ付、十三ヶ年以前右相改候様被仰渡、則出来仕候、然処当年御用之節、右新惣絵図見当リ不申候故、先年之惣絵図を以写指上候処、頃日町会所古書物入櫃ゟ右新絵図出申候ニ付、見競候処、見当等少々宛違居申候、依而新惣絵図之分壱枚為相調差上可申候へ共、当年出来不得候間、右出来迄先達而差上候分相添上之申候、明春新絵図之分出来、差上可申候

これは惣絵図について記されたものとみられるが、「前々より」この種の図が町会所に備えられていたこと、そして「十三ヶ年以前」つまり寛政十一年に改訂があったこと、今般またその新絵図づくりの行なわれることなどがわかる。「前々より」の絵図とは前掲の享保の「四十五枚」絵図やそれに基づいて作成されたであろう惣絵図を指すであろう。そしてそ



第4図　金沢町方絵図部分図の一部

の折のごとく各町の肝煎から提出させたのがこの「部分図」である。

図には道（黄色）・水系（水色）・山野（緑色）の彩色を施すほか、赤の■印で番所を示し、町境の柵や木戸は簡略ながら景観図風に描く。水系に架せられた橋も、小さいものまですべて記入してある。井戸の分布も示す。また四つ辻など要所要所には方位盤を書いている。郊村は黄色の家形を五つ六つに緑色の竹藪などを添えて表現している。田畑は所々に「田」また「畑」の文字で示す。

むろん本図の目的は各戸の住人を正確に把握するところにあるわけだから、各戸に屋号・名前を書込み、またたとえば「地子地」に属する場合は「チ」のごとく、一軒ごとに略号をうち、本町・地子町・相対請地などの別を示す。さらに各人の右肩には、十人組の組分けを表わすイロハの記号が赤で付され、その数組の連合を才許する組合頭には赤丸が付されている。間口の間数などは一切記入していないが、縮尺三六〇分の一をもってほぼ正確に描かれ（従って図の大きさは一一〇×八〇センチメートル、八〇×八三センチメートルなど、各町によって区々である）、絵図ごとに総間数が書上げられている。たとえば石浦町の場合はつぎのとおりである。

肝煎市兵衛才許

一弐百拾六間壱尺四寸七歩八厘　石浦町惣間数
尻地拾四間　惣家数
一六拾五軒
内　イ印組　拾四軒
ロ印組　拾軒
ハ印組　拾軒
〆　三拾四軒　組合頭井波屋　太郎兵衛組合
ニ印組　九軒
ホ印組　拾弐軒
ヘ印組　拾軒
〆　三拾壱軒　組合頭能登屋　半三郎組合
一百三拾歩三尺九寸　地子地請込
内　弐拾歩壱尺　安永九年出来　井波屋太郎兵衛当分請地
残　百拾歩弐尺九寸　出来年号相知レ不申候

また絵図には「町医師」など特別のものを除けば、屋号のみで職種は記されていないが、「絵図名帳」の方には「桶屋職　堀田屋甚助」・「指物職　吉河屋伊兵衛」のように職種をも書かれている。さらに町屋地区に混住している下士などについても「割場付足軽　若木喜左衛門」のごとく書上げられている。寺には名称のほか宗派の別も記している。

このため本図と絵図名帳とによって、文化八年現在の金沢城下における「家毎の家業を一目瞭然にみ得、これを通して金沢町人の職業構成、職業別居住域分布、本町・地子町・相対請地景観、経済性、および盛り場、繁華街の位置、侍・町

第１表　藩政後期の金沢城下絵図一覧表

	名　　称	所　蔵　者	分類番号	作　成　年	サイズ　cm	備　　考
(1)	〔寛政金沢図〕	金沢大学教育学部		宝暦７年頃	192×176	
(2)	〔金沢地図〕	金沢市立図書館	090-847	寛政後期	179×177	
(3)	〔金沢地図〕	〃	K2-444	〃	69× 81	文化６年写
(4)	〔金沢地図〕	〃	090-487	文化初期	150×170	
(5)	〔金沢城下大絵図〕	〃	K2-840	文化期	156×170	文化14年湯浅祗庸写
(6)	金沢町方絵図部分図	〃	13.0-101	文化８年	41× 78	割図27枚，大正期氏家栄太郎写
(7)	加州金沢大絵図	室賀信夫		文化15年	95× 90	
(8)	加陽城下図	金沢市立図書館	090-342	文化末～文政前期	86× 90	野村英林写
(9)	金沢町奉行支配所町筋之図	〃	13.0-103	文政２年頃	180×200	大正期氏家直孝写
(10)	金陵之図画	〃	090-704	文政３年頃	95× 82	
(11)	城下町割之大図	〃	16.8-170	文政４年頃	290×295	
(12)	〔金沢図〕	〃	16.8-171	〃		割図31枚
(13)	〔金沢城下町之図〕	〃	16.8-169	文政６～11年頃	204×335	
(14)	〔金沢地図〕	〃	K2-657	文政中期	210×360	槻橋弥三良写
(15)	〔文政金沢図〕	金沢大学教育学部		〃	86× 69	
(16)	文政年中金沢之図	金沢市立図書館	19.9-72	〃	240×260	後藤家旧蔵
(17)	金沢之図	南保　進		文政11年	80×131	伝前田直時愛蔵
(18)	金沢地図	金沢市立図書館	096.0-266	文政13年頃	68× 87	岩本愛之写
(19)	御次御用金沢十九枚御絵図	石川県立図書館		〃		割図10枚
(20)	金府図	金沢市立図書館	090-585	天保２～３年頃	79× 94	
(21)	金沢城下絵図	〃	13.0-80	天保初年		割図９枚，明治40年氏家直孝写
(22)	〔金沢市街図〕	〃	K2-250	天保２～９年頃	82× 94	
(23)	〔金沢地図〕	〃	090-282	天保後期	77×124	
(24)	〔金沢市街図〕	金沢大学教育学部		天保末期	89×131	
(25)	〔金沢之図〕	金沢市立図書館	19.9-76	嘉永期	169×169	後藤家旧蔵

〔　〕は所蔵機関における仮称。分類番号は金沢市立図書館のもの。

人居住の入組み様、武家奉公人分布など多目的把握ができる」[2]のであり、すでにその一部については水上一久氏[3]や田中氏によって詳細な分析が加えられている。とくに職業の構成・分布、また町年寄―肝煎―組合頭―組の地域的編成の復原できる点が、本史料の著しい特徴であろうと思う。

この文化・文政の二大事業の前後から、伝えられる絵図も多くなり、その作成時期の不明なものも少なくなかった。田中氏は宝暦以降の諸図の多くについて、八家の家譜および藩校・竹沢御殿・芝居小屋・遊郭などをメルクマールとして、この煩瑣な作成年代の推定に一応の結論を下している。たとえば従来、「寛政図」とされてきたものを宝暦後期、同じく「天保図」と称ばれていたものを寛政後期の成立と推定するなど、金沢城下絵図史に幾多の新しい知見がもたらされたのである。

以下、小稿では、年代想定などについては専ら氏の業績に拠りながら、地図史的な視座からの観察を加えてゆくことにしよう（第1表参照）。

さて、右図と同じく町方支配関係の図として注目されるのは、(9)「金沢町奉行支配所町筋之図」（文政二年写図）である。道（黄色）に町名が入れてある他は注記がほとんどなく、惣構堀その他の水系には青色をぬり、橋が比較的詳細に記載されているのが印象的である。本町・地子町の別はもとより、町屋地区と侍屋敷地区の区別さえないので、街路と水系のみをテーマとした、いわば都市土木図とも考えられる特殊図である。しかし、ごく一部に寺名を書入れてあるので、あるいは右の部分図から惣町絵図を編纂する過程にある未完図であるかも知れない。

いま一つ特殊図として文政十一～十三年ごろの作成とされる(18)「金沢地図」があげられる。これは金沢大学教育学部蔵の(15)「文政金沢図」と同縮尺、紙幅もほぼ同一で、この系統の図をベースマップにしたものと考えられるが、主題を寺院の宗派別にしぼっている点が特異である。町屋は本町・地子町の区別なく薄墨色で、また武家については侍屋敷・組屋敷・下屋敷の別なく薄茶色で表わし家中のうち、主要なものには姓名（大身には禄高も）、その他のものには姓だけが書入れ

てある。これらの点は他の城下絵図に共通するところが多いが、寺の宗派別を色で塗りわけているのは本図だけである。すなわち曹洞宗（茶色）、臨済宗（朱色）、同法洞派（茶緑色）、律宗（白色）、真言宗（淡緑色）、浄土宗（茶色）、時宗（淡青色）、法華宗（樺色）、西本願寺派（淡墨色）、東本願寺派（淡茶色）。「文政十三庚寅三月完成岸本愛之」と記名する人物については明らかでないが、田中氏は、「寺社奉行関係者に依るもの」かと推測している。しかし余白に江戸・鎌倉・大阪・彦根・宇治・堺・名古屋および領内一五二町村への「金沢ヨリ諸道程」が記載してある点などから考えれば、あるいは民間の宗教関係者の作成かとも想像される。

これらのいわば民政用のテーマ図に対し、文政四年ごろの(12)〔金沢図〕は、「御普請会所侍屋鋪等間数附」と付札にあるように、普請会所の作成にかかると思われる屋敷割り図である。詳細な分間図で、大小区々、また形状も半円形・方形など様々の三一枚に切られており、各割図に付された丸に十字の赤い記号で、接続できるようになっている。町屋地区については本町、地子町と注記するだけで町名もないが、家中の姓名、間口・奥行の間数を書入れ、八家については本図では空白にして屋敷ごとの別図が作られ、貼りつけられている。組地などについてはブロック毎に「御武具土蔵付足軽五人」式に記載する。前記の丸に十字の記号以外は、一切色彩はなく、所々に「此所如此溝候哉」など疑問点を朱で書き込んである。以上を総合すると、これは大きな屋敷割りの一枚図を作成するための準備段階の図でもあろうかと推定される。

また天保初年の(21)「金沢城下絵図」は、九枚よりなる割図（一枚はおよそ五六×八〇センチメートル）であるが、余白に地類わけの凡例をかかげる。往来（黄色）、河溝（青色）など一般に用いられる色わけのほか、町屋については本町・地子町の区分さえせず薄墨色一本であるのに対し、御普請会所（赤色）・八家（薄赤色）・人持組七二家（淡樺色）・寄合組一四家（濃樺色）・足軽小者などの組地（薄青色）のごとく、家臣団の屋敷をクラス別に色分けしている点に著しい特色がある。とくに赤は御普請会所のみの所在を示すわけではなく、天徳院・宝円寺・観音院など前田氏と由縁の寺社、および藩校・公事場・町会所・射場・角場などの公的機関に共通して彩られているもので、④いわば御普請会所の管轄地物を示しているかのごとくである。

なお、本図においては下屋敷は薄茶を施すのみで、のちに一般図の乙群の標識とみなす朱線を欠くが、北の大樋町の背後に「蓮池」を二カ所載せる点や、華麗な描きぶりが、後掲の(13)〔金沢城下町之図〕（文政六～十一年頃）にきわめて近い。おそらく右図などを基図にしてなった主題図なのであろう。

① 矢守「御次御用金沢十九枚御絵図とその作成過程について」　人文地理三一―一。

② 田中他『伝統都市の空間論』　一〇六ページ、また同氏著『城下町金沢』　日本書院　昭四一にも相対請地などについての精密な分析がなされている。

③ 水上一久「城下町金沢の職業構成――文化八年金沢町方絵図名帳による考察」金沢大学法文学部論集　哲学史学篇九　一二一ページ以下。

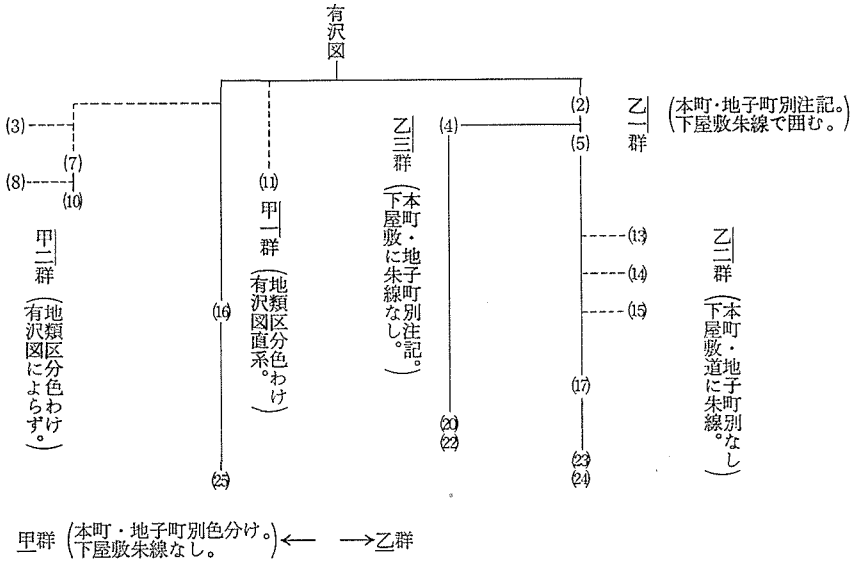
④ たとえば「宇和島城下絵図」元禄十六年では樺色、享保三年頃の岸和田城下絵図（勝井五一郎氏旧蔵）では土色（大越勝秋「岸和田の城下町」教育地理三）、「但馬国出石城絵図」（文化七年、出石町教育委員会蔵）では赤色、天明年間の広島城下絵図（『新修広島市史』五　昭三七　所収）では朱色がそれぞれ公用機関に彩色されている。この種の地類わけと色彩による記号をもふくめた城下絵図の図式についての対比考察も「まえがき」に述べた(B)に属するもので他日、発表の機を得たいと思っている。

四　後期の一般図の系統分類

前章のテーマ図以外は、すべて一般図として括ることができるが、見方によってはこれもまた土地利用区分図というテーマ図であり、金沢の場合、その原型をなしたのは有沢武貞の「加州金沢町割正極之大図」であったといえるであろう。本図以降の一般図を分類し整理するにあたっても、この有沢図との異同が重要なメルクマールになるものと考える。つぎに掲げる第2表は、市立図書館所蔵図を中心に、記載内容、またとくに図式や縮尺など地図史的な視座より試みた系統分類のスケッチである。ほかにも市民の間などに、多くの絵図が伝えられているであろうし、それによって再検討されるべきことはいうまでもないが、逆にそれらの諸図の位置づけに、一応の手がかりを提供しうるものと思っている。

一つの流れは本町・地子町などの別を色分けで示し、下屋敷地区の内部の道、あるいはその外郭に朱線を施していない絵図群として一括できる（甲群）。まず有沢図の直系といえるものからみてゆこう。時代は下るが(16)「文政年中金沢之図」

第２表　藩政後期の金沢城下絵図系統分類



（図番号は第１表参照。）

（縮尺約一〇〇〇分の一）や嘉永期の(25)「金沢之図」などは地類を示す色わけまで有沢図のそれに共通するものが多い。ともに藩の穴生取締役をつとめた後藤家につたわった図であることも注目をひく。たとえば前者が侍屋敷を黄（山吹色）、本町を燕脂、地子町・地子地を丹、橋を紅黄色で表わす点などは有沢図に等しく、足軽小者を空色で示し、村名を丹黄土色の小判形に記す点は、それぞれ有沢図の「萌黄　足軽小者」や、「丹黄土　百姓地」に通ずる。嘉永期(25)「金沢之図」になると、二一項の「彩色之凡例」を掲げるが、そのうちつぎの各項は、先に引いた有沢図の「二五品」と重なるのである。

（墨）惣構之土居并馬場、（藍）河堀溝用水水道溜水、（黄）侍屋敷、（萌黄）小人馬取等ノ類并長柄小者同小頭等、（燕脂）本町屋、（丹黄土）百姓地、（紫）寺社門前地町屋、（紅黄）橋、（藍墨）屋称、（濃萌黄）樹木森林並木。

なお、この図では「（薄桃色）侍屋敷ノ請込地或地子地」、「（茶色）用屋敷」など、有沢図以上に詳細な地類の別を加えており、また(16)「文政年中金沢之図」ともども、下級の士分の屋敷にまで姓または姓名を記入している点でも有沢

図より詳しい。山や大きな寺社の景観図的な描出、ことに下屋敷に家紋を書入れているところなどは、有沢図以前の寛文・延宝図の影響をうかがわせるものである。

いま一つ、この系統に属するものと考えられつつも、特異な大図がある。文政四年の⑾「城下町割之大図」がそれで、縮尺は前記の同年作成の⑿〔金沢図〕と同じく一分一間図、つまり六〇〇分の一、城と惣構の間を描く。ごく一部に屋敷割りを書きかけており、未完の図と思われるが、注目すべき点は有沢図と同じ地類わけの彩色を行なっていることである。すなわち本町を燕脂、地子町を朱、組地を空色(有沢図では浅黄色)、侍屋敷を黄色、寺社を鼠色、門前町を紫土で表わす。藩がどういう目的で、このように大きな土地利用図を作成しようとしたのか、興味のあるところであるが関係史料は見出せない。あるいは文政五年に下命される「御次御用十九枚御絵図」作成に関連するものであろうか。

ところで、作成時期は右の後藤家図よりやや遡るが、室賀信夫氏蔵(7)「加州金沢大絵図」(文化十五年)や⑽「金陵之図画」(文政三年ごろ)は、有沢図の地類わけの配色とはかなり異った彩色を施している(甲二群)。すなわち前者は本町を薄萌黄色、地子町を鶯色、後者は本町を墨、地子町を薄墨に塗り分けている。しかし前者はこの他、百姓地は有沢図と同じく丹黄土にするのをはじめ、山・道・水系、さらに有沢図にはなかった「(白)拝領地七ヶ所御預地并請地印」の別を立てた凡例を掲げ、後者にも前記のほか、相対請地を淡赤で区分するなど色わけによる土地利用分類図の要素が濃厚である。なお(8)「加陽城下図」(文化末〜文政前期)は、本町・地子町の別を彩色ではなく文字によって示している点で後述の乙グループに近いが、(黄色)道、(青色)水系、(赤色)橋、(茶色)山、(緑色)木の凡例を掲げているし、「金陵之図画」と同じく大身邸に家紋を入れる。以上三者ともに縮尺約六〇〇〇分の一、(8)「加陽城下図」もこの系統の亜種としておこう。

逆に寛政後期の(3)〔金沢地図〕は本町・地子町をともに薄青色として区別していない点、乙二群に通ずるけれども、乙群の特色である下屋敷の朱線も欠いている。そして、組地に薄墨色、侍屋敷に薄燕脂色、寺社に白色を彩色し、大寺社や主要な橋、村落を景観図風に描くなどの点から甲二群に編入してみた。田中氏は「御用屋鋪、女中屋鋪の記載、八家国守号

の叙任、通称の用い方等」記載内容において、本図は(2)〔金沢地図〕と全く同一と指摘しているが、[1]これはその成立年代がともに寛政後期であるためであろう。両者の間には本町・地子町の別の有無や彩色、そしてスケールにおいて相違がある。本図は甲二群と同じ一分十間図である。

金沢城下図の一般図の系統樹において、甲・乙二群の大きな分岐点をなす標識として、前にふれたように下屋敷に施された朱線をとりあげることにした。朱線の意味は不詳であるが、今日のいわば〈公道〉に対する〈私道〉を表わすもの、下屋敷の周囲に施された場合は〈私領〉の範域を示すものと思われる。[2]これは寛政後期の作成とされる(2)〔金沢地図〕あたりから出現するもので、この図と(5)〔金沢城下大絵図〕（文化十四年湯浅祗庸写）においては大身の下屋敷の周囲が朱線でかこってある。そして、本町・地子町・百姓地などの区別を、彩色によってではなく文字で示してあるのが特徴である。なお、前者では城内もかなり詳しく描かれ（後者では城内は空白）、角場の名称なども記入している。ともに寺院に名称のほか「日」（日蓮宗）、「セン」（禅宗）のごとく宗派を示す略号を付す。道を黄色、水系を青色、崖・山などを緑色で塗ることは他とかわらない。縮尺はともに約三分十間二〇〇〇分の一。

乙二群として括ったグループになると、下屋敷地区内の道路網に朱線が入れられ、本町・地子町の区別が行なわれず、町屋地区一本で薄墨が塗られるにとどまる。しかし、(13)〔金沢城下町之図〕（文政六～十一年頃）に代表されるように、竹沢御殿・観音院・春日社などの堂宇は狩野派流の手法で極彩色に描き、村落も数戸の家屋と木々で表現し、枠で囲った村名を付している。北部の大樋町の背後の田地に「蓮池」三カ所を載せるのも本図の特異点の一つである。「槻橋弥三良図之」とある(14)〔金沢地図〕は、右の模写で、縮尺はともに六分十間（一〇〇〇分の一）、ただし前者では若干の農家を描いて村落を表わしているのに対し、後者では点線で囲った楕円の内部をオレンジ色で塗っている。また後者には城内はじめ一五カ所に方位盤を書き入れている。金沢大学教育学部蔵(15)〔文政金沢図〕は、この後者、つまり槻橋弥三良図を一分十間に縮小して写したものとされるが、[3]寺社地に桃色、組地に鉄緑色、郡地に黄色を施すなど、さらにカラフルとなる（なお、先に寺

院の宗派別をテーマとする図として掲げた⑱岩本愛之写図は、本図と同サイズである)。さらに南保進氏蔵⑰「金沢之図」(文政十一年)や金沢大学教育学部蔵㉔〔金沢市街図〕(天保末期)、市立図書館蔵㉓〔金沢地図〕(天保後期)なども乙二群に属しよう。⑰南保氏本は前田直時愛蔵と伝えられるもので、重厚華麗な描きぶりであり、他の二点も観音院や山や木など、また村落も数個の屋根形と樹木で景観図風にあらわし、八家には家紋を入れている。いずれも約八〇×一三〇センチメートルのサイズである。この三点は系統的に親縁関係にあるが、後の二点は南保氏本に比べ、かなり粗い写図である。

つぎに乙三群として一括する諸図は、本町・地子町の別を文字で示す一方、乙群の標識とした下屋敷の朱線を欠いているので、これを甲群とみなし、甲群の特色である本町・地子町の色わけを、文字の注記をもって代えたものと解することもできる。しかし、(4)〔金沢地図〕(文化初期)は、縮尺(三分十間)や、本町・地子町の注記の仕方などにおいて乙一群に通ずる面が濃厚なので、(2)〔金沢地図〕(寛政後期)や(5)湯浅祗庸写図〔金沢城下大絵図〕(文化十四年写)と系統を同じくしつつも、下屋敷の朱線を略したものと想定してみた次第である。天保二〜三年ごろの⑳「金府図」と同じく天保前期の㉒〔金沢市街図〕は、縮尺も、また城内には「御城」と記入するのみである点、城郭の墨の線、観音院などの景観図その他、同類のものである。縮尺はことなるが、右の(4)〔金沢地図〕(文化初期)に共通するところ多く、同じく乙三群に属するものといえるように思う。

① 田中「城下町古図について」四〇ページ。

② 件の下屋敷の朱線は原田伴彦・西川幸治・矢守編『中部の市街古図』鹿島出版 昭五四 所収(南保進氏蔵「金沢之図」、表1の⑰)、矢守編『金沢・名古屋』(日本の古地図12) 講談社 昭五二 所収(表1の㉒)の各カラー復製版を参照いただきたい。

③ 増田「金沢城下古図のしおり」四ページ。

〔付記〕調査に際し格別の御世話をいただいた金沢市立図書館の宮竹広春館長、谷村史・吉本澄与治の各氏、ならびに国田太郎館長、高桑和子・表政直・香村幸作氏をはじめ石川県立図書館の各位に、衷心より御礼申上げる次第である。

(大阪大学文学部教授 [redacted])

The Relative Values between Gold and Silver under the Later Abbasid Caliphate, 907–980 A. D.

by

Keishiro Sato

We may conclude from several statements of "Kitāb Ta'rīkh-e Qomm", Miskawayh's "Kitāb Tajārib al-Umam" and other islamic sources about the relative values of gold and silver under the Caliph al-Muqtadir (907–932) in the tenth century as follows:

1) the dinar was reckoned as 15 dirhams.
2) the gold-silver ratio was $13\frac{2}{3}$: 1.
3) the dinar of pure gold bullion having the standard weight (one mithqāl) was equivalent to 17 dirhams.

It was caused by scanty supply of legal coins by the government and hoard of standard coins by powerful people that the civil demand for necessary amounts of coins was not filled and a great quantity of debased coins was thus prevailing, so that it was inevitable to weigh and assay broken coins, grains and ingots of precious metal and to calculate in terms of pure gold dinar both in public and private accounts.

The Antique Maps of the Castle Town *Kanazawa* 金沢

by

Kazuhiko Yamori

In the fields of antique maps of the Edo era, studies on the manuscript maps of the castle towns have been rather neglected, compared with those of the printed maps. There may be two ways to treat the antique maps of the castle towns. One is to classify them by comparison, and the other is to inquire various maps of an individual town historically, the way the author adopts in this article. He takes *Kanazawa*, the castle town of the largest *han* 藩. Among many antique maps of that town, the splendid map presented to the *bakufu* 幕府 in

1668, several maps made by *Takesada Arisawa* 有沢武貞 who was a *samurai* of that *han*, the precise survey completed in 1829 and some others are important. There are increasingly more maps in the nineteenth century. The author divides them into two parts, that is thematic maps and general maps, and furthermore subdivides the latter mainly according to the degree of relation to the maps by *Arisawa*.